MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．１１．１９　発行元
第 418 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

今野 敏の代表作

今野敏の代表作３作を考えてみよう。最近作はほとんどこの『ミステリ読書案内』で取り上げて紹介してきたので、少し前の作品を中心に考えることにする。警察小説作家としての成長・進化の後を辿りながら。

今野敏の進化の跡

今野敏が作家としてスタートしたのは１９７８年。それからの長い期間注目を集められずに過ごした。今読んでみると初期シリーズもそれなりに楽しめるのだが、どうしても特殊技能・才能に頼った物語設定で、武道などのアクション重視の傾向が強かった。それを「警察小説」という形に結びつけて進化させていった作品が今回取り上げる代表作３作になる。『隠蔽捜査』に至る道筋とでも言えるだろう。

「安積班」の「ベイエリア署」がスタートし、「ＳＴ班」が動き出すことによって次第に今野敏なりの警察小説のパターンが出来上がっていったと考えることができる。

ということで、集大成の『隠蔽捜査』をＮｏ．１にし、『ＳＴシリーズ』からは『赤の調査ファイル』を、『安積班シリーズ』からは『イコン』を代表作に選んだ。もちろん『ＳＴ』の色別調査ファイルはどれを読んでも面白いし、『安積班シリーズ』も傑作揃い。『樋口顕シリーズ』の『ビート』、『碓氷弘一シリーズ』の『アキハバラ』なども印象深い。ベストセラー作家になってからは余裕も出てきて、肩肘の張らない読物も増えたと思う。

NO.3　『イコン』

１９９５年講談社。『安積班シリーズ』の一冊ではあるが、本作では安積は脇役の形になっている。前年の『蓬莱』とともに今野敏なりの警察小説への転機となった作品。

「イコン」とはキリスト教の「聖像画」のことであるが、ここでは現代の若者が夢中になるバーチャル・アイドルを取り上げ、文化の有り様を考えさせる設定になっている。主人公役で登場する警視庁生活安全部少年課の宇津木真警部補がライブハウスに潜入捜査している場面から始まる。その中で喧嘩から乱闘騒ぎになり、一人の少年がナイフで刺されて発見された。宇津木は安積と協力して一歩一歩前進しながら、社会問題を把握し、自分の考えを新たなものにしていく。

NO.1『隠蔽捜査』

２００５年新潮社。吉川英治文学新人賞を受賞した。『このミス』ランキングの２０位に登場して、人気爆発に結びつくきっかけになった本。シリーズ２作目の『果断』は４位になり、日本推理作家協会賞・山本周五郎賞になった。今野敏のナンバーワンの作品と言ってよい。

このシリーズを支えているのは竜崎伸也である。特に最初の作品である本書の出だしは竜崎の人物像を描くことに費やされている。とにかく堅物。変人。融通が効かないように見える。どんな時でも自分の信念を曲げないので、いろんな場面で周りとの衝突が起きる。彼は警察庁のキャリアで、この段階では長官官房でマスコミ対策に当たっている。そして竜崎を支える役目で出てくるのが幼馴染で同級生の伊丹。警視庁の刑事部長をしている。東大卒と私立大卒。この二人の活躍がシリーズの中で展開していくのである。警察小説の典型のようにも見える。でも、それに竜崎の家族、妻、娘、息子が絡んでくるところが本書の重要なポイントになっている。事件に集中しようとする竜崎を悩ます難問が控えているのだ。連続で発生する殺人事件、組織の中の連携、マスコミへの発表をどうするか…。読者は多方面でのハラハラを体験することになる。

No.2『ST赤の調査ファイル』

２００３年講談社ノベルス。１９９８年にスタートした『ＳＴ警視庁科学特捜班シリーズ』の第５作に当たる。私が考えるこのシリーズ中の最高傑作は『緑の調査ファイル』で、それについては『ミステリ読書案内』第２６７号で取り上げて紹介した。それで今回は『赤調査ファイルの』にした。「ＳＴ班」は５人の特殊能力を持つメンバーで構成され、「赤」に当たるのが法医学担当の赤城左門。赤城が本書で中心的な役割を果たす。医療をテーマに掲げた作品である。

発熱して病院に来た患者が急死した。最初の診断はインフルエンザで、処方された薬を飲むだけの指示。でも、途中で全身の皮膚が赤くなり、はがれる症状が出たのに病院の対処は遅かった。遺族が起こした民事裁判では病院側の医療ミスはなかったという判断。そこで、警察に訴えて刑事裁判として捜査をしてもらうように動いた。「ＳＴ班」にその役目が回ってきて、赤城は難しい立場に。何しろ自分の出身大学の病院であり、対人恐怖症の持ち主なので、担当教授との軋轢が後を引きずっていたのだ。病院側の医療ミスがあったはずだという信念を貫く赤城の活躍が読みどころ。結末まで一気に読み進めることができる。